

続西の川の物語



宝賀勝鉱山は明治37年の「明治末期銅山」として高知県の代表的な銅山として知られている。

安芸銅山は明治末期からは大西銅山と呼ばれて採銅される。銅山権者は変わっていくが、1956年安芸之川銅山から安芸銅山と改称し採掘。西の川から索道により伊尾木側へ運ばれた。1960年代に閉山。

西の川林道終点より谷間の歩道をとると平坦地がある。明治～昭和初期まで採掘していた銅山の跡が、今でも水も湛えた銅山口が残っている。また、平家落人の墓が川に注いだという平家平で、平家平＝平家屋敷と考えられている。

安芸銅山で採銅のあと、いろいろな遺跡が残っている。銅山の製錬には大量の炭が必要で、山中に残る炭家は銅山と連動していた。

銅山がある頃は西の川ではアマガサがはびこっていた。

西の川に潜伏していた平家一行が滅びると分散して山を越え下久保へ移住し、土地を開拓していた。氏神様には京都の雨若神社とされ、また秋葉権現愛宕の「消しの地蔵」が祀られている。

下久保山 樹も草も静かに潮が流れる

この下流に宝賀勝鉱山

別役往還 別役の途中は別役より五里

北の谷 西の川では谷と川が小舟をせられんといふ言い伝えが残っている

西の川山ガサワラ保護林 紀伊半島と高知県の東部にだけ自生する希少な樹木の林

南の谷 南の谷にはうみくまといふクマノコが生え、昔には伊尾木からバイクに乗って採りに来た

美敷谷 美敷谷山のヒメは美しくとも価値が高かった

時代が変わり歴史や特性が刻まれた地名が消えていくことがとても寂しい。お話しを聞いておきたい。

日本一長い名前山 丸塚宝加勝下宝加勝山

別役往還の途中は別役より五里

西の川では谷と川が小舟をせられんといふ言い伝えが残っている

西の川山ガサワラ保護林 紀伊半島と高知県の東部にだけ自生する希少な樹木の林

南の谷 南の谷にはうみくまといふクマノコが生え、昔には伊尾木からバイクに乗って採りに来た

美敷谷 美敷谷山のヒメは美しくとも価値が高かった

時代が変わり歴史や特性が刻まれた地名が消えていくことがとても寂しい。お話しを聞いておきたい。

その昔、サルの大木の上から赤いおぼろが落ちてきて下りてくるものに旅人が生かされた。それは宝賀勝の銅山に採り出された金の精進のたごきと語り継がれている。(安芸の民話 第3巻)

西の川(西の河) (にしこの川) 源平の屋島合戦に敗れた平家の一行が、四国の深く険しい山を越えて西の川へのがれてきた。一行の首は平氏の領い人の奥方、虎馬御前と虎姥御前といわれる。一行は西の川に平家屋敷と拓いて粟や稗と作って七十五人が暮らしていた。しかし源氏の追手が迫り、西の川の渡り七十五人が身投げをしたことが事実として伝わっている。

西の川の神社に祀られている神様はともも備い神様で、雨乞いであれば、たちどころに雨が降ったという。お参りをすると「平家は十三体、堂の明現、平家八幡、虎馬御前七十五人の御着族様」とお唱えせなにかんといわれる。

平家落人一行の首は自分の首い人の奥方、虎馬御前と虎姥御前といわれる。

西の川神社 山で修か、私達は山の安全を祈願する。

西の川神社の下から十三のお釜(釜)があった。谷川の流が長い年月をかけて磨きあげ、神秘的な雰囲気をつけた。昔の人々はここに豊前黒飯と抱いていた。

裏政谷 裏政の基落は平家のほかに、住人がいなく、静寂している。

安芸市伊尾木川の上流、西の川。平家落人伝説と数々の不思議な伝説が伝わる山深い秘境。深い奥山の緑が湿った空気に包まれてひとまね濃く、美藝ダムに映る。

西の川(西の河) (にしこの川) 源平の屋島合戦に敗れた平家の一行が、四国の深く険しい山を越えて西の川へのがれてきた。一行の首は平氏の領い人の奥方、虎馬御前と虎姥御前といわれる。一行は西の川に平家屋敷と拓いて粟や稗と作って七十五人が暮らしていた。しかし源氏の追手が迫り、西の川の渡り七十五人が身投げをしたことが事実として伝わっている。

西の川の神社に祀られている神様はともも備い神様で、雨乞いであれば、たちどころに雨が降ったという。お参りをすると「平家は十三体、堂の明現、平家八幡、虎馬御前七十五人の御着族様」とお唱えせなにかんといわれる。

平家落人一行の首は自分の首い人の奥方、虎馬御前と虎姥御前といわれる。

西の川神社 山で修か、私達は山の安全を祈願する。

西の川神社の下から十三のお釜(釜)があった。谷川の流が長い年月をかけて磨きあげ、神秘的な雰囲気をつけた。昔の人々はここに豊前黒飯と抱いていた。

裏政谷 裏政の基落は平家のほかに、住人がいなく、静寂している。

大久保にある西の川神社には、平家落人御前と刻まれている。

雨乞い、西の川の神社の下にお釜に酒一斗をうつして、大夫さんが祈願した。

昔の人が子どもの頃に聞いた話では「伊尾木川へ、奥から箸やら、おぼろやらが流れてくるので、川下に住む人は上流の奥には人があるといふことになり、鏡をたいて言方ねて行方。それなら平家の人たちは、源氏が攻めてきた」と思っ、西の川のお釜(釜)へお釜を注いで、75人が死んでしまった。西の川は入口の黒も悪く、そこには行かぬといふこと、こんな話ができたりもせぬと語っている。

安芸管林署のB木田橋太郎は西の川にまつ話を聞いて記した。

参考文献 安芸の民話 1~3巻

